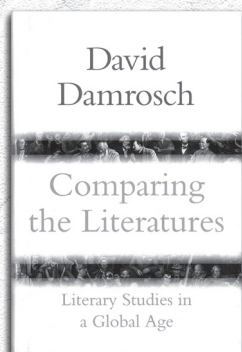


マヌエル・アスアヘアラモ



David Damrosch

Comparing the Literatures: Literary Studies in a Global Age

Princeton University Press, 2021

デイヴィッド・ダムロッシュ著

諸文学を比較すること——グローバル時代における文学研究

Implicitly or explicitly, any attempt to delineate world literature entails defining the world—the world created by the text, the world of the text's creator, and the worldly location within which we carry on our studies. (292)

2013年に出版されたエミリー・アプターの『世界文学に抗して：翻訳不可能性のポリティクスについて』*Against World Literature: On The Politics of Untranslatability* (2013)の書評を、アメリカの比較文学者デイヴィッド・ダムロッシュは、彼独特の古風なウィットを漂わせる文章で始めているのだが、その文章は、当時からずっと筆者を笑わせてきた。アプターによる、世界文学研究への批判を受けて、ダムロッシュの書評は次の格言から始まっているのである。

It is surely a mark of some kind of success when a movement begins to be attacked by its own participants.¹

(ある運動が、その運動自体の参加者たちによって批判され始めるということは、ある種の成功の証に違いない)

こうして、〈世界文学〉の概念の根底にある、文学の「翻訳可能性」に疑問を投げかけるアプターの支離滅裂な批判を受け流し、その批判そのものを敢えて世界文学研究の一種として捉えているダムロッシュの反応はいかにもダムロッシュらしい。そしてこの意見が代表するように、世界文学を批判するという行為自体が、ある種の世界文学を生産することになるわけである。『世界文学とは何か?』(原書2003年、邦訳2011年)の刊行から18年以上経っている今日、〈世界文学〉という表現は、この書評で紹介する本書でダムロッシュ自身が述べているように、『世

『世界文学とは何か?』で示されたものとは異なるものを指すようになっている。その理由には、前述のアプターの本など、同書以降に出版された数々の研究書の働きが認められるが、二十余年にわたってこの研究分野が辿ってきた変遷を体系的に捉えようとしているのが、本稿で筆者が批評する著書、『諸文学を比較すること—グローバルな時代における文学研究』(2020年)である。

ダムロッシュの世界文学論を考えるための二つの系譜

私事ではあるが、筆者自身がダムロッシュに初めて出会ったのは10年ほど前に遡る。筆者はそれ以来、最終的に本書の内容の一部となった、ハーバード大学での彼の講義やセミナーを受講しただけではなく、世界中の様々な地域(日本、北京、アメリカ、トルコ、スペインなど)で行われた公開講演や、レクチャー、基調講演なども聴講してきた。つまり、筆者にとって、本書について書くことは、それぞれの地域の聴講者の趣味に合わせ、彼らの関心を惹くような形(たとえば、日本の講演ではブルーストと三島を比較してみせた箇所は、イスタンブールではブルーストとオルハン・パムクの比較に変更されるなど)で行われた数々のレクチャーが、連鎖する形でいかに統一された世界文学論を成したかについて考えることも意味する。たとえば、本書のタイトルの元ネタとなっているエピソード(1)を初めてダムロッシュの口から聞いたのは、2012年のイスタンブールで行われた世界文学学院の際だったが、その後同じ話題について、口承文学のように、様々な場で若干異なったいくつかのバージョンを彼の口から聞くことにもなった。

こうして、本書のページをめくっていくと、ボストンとニューヨークで初めて芽生えた数々のアイデアが、世界中の様々なアカデミックな場で繰り返し議論され、多くの批判や意見を取り入れた末に完成したものであることがわかる。『世界文学とは何か?』の続編というよりは、ある意味、そのバージョン2.0のような著書である。しかし、前著とは若干異なった趣の本になっている印象を持つことだろう。

なぜなら、本稿で扱うダムロッシュの著書は、狭義の「文学」やテキストとしての「世界文学」についての一冊であるというよりは、研究分野としての「世界文学」についての本である。言い換えれば、文学のScholarshipよりは、文学のMeta-scholarshipのような研究書である。90年代において多民族社会の動きが急速に拡大していたアメリカに対するアカデミアの反応として生まれてきたのが、世界文学研究の再復興だと言える。『世界文学とは何か?』での議論は当時のそのような緊張関係、言い換えれば、いわゆるマイノリティーに属する生徒の増加と、従来の西洋中心的な文学カノンのあいだの緊張関係から生まれており、その考察の対象は主として欧米の教室の中で扱われる文学作品だった。その工程を連想させるように、『諸文学を比較すること』は、欧米に端を発する「世界文学研究」と、現在世界中で実践されている様々な越境文学の研究のあいだの緊張関係から生まれたと言っても過言ではない。すなわち、前者の本では文学作品を通して実践しようとした「文学」という現象に関する考察は、後者の本において、世界各地で実践されている「世界文学研究」の起源と現状に関する考察となっているのである。換言すれば、文学と文学研究の本性を、変化しつつあるグローバルな意識のなかで捉え直し、世界文学という研究

分野のこれからの方向性を定めようとしている本である。

この研究分野を捉え直すためにダムロッシュが使用している分析手法としては、従来の作品精読に加え、モレッティが提案した〈遠読〉のような、複数の作品群を俯瞰的に捉えようとする分析が目立つ。一方、その作業以上に、紙面を割いてダムロッシュが説明していることは、文学研究そのものの時代別、地域別の特徴の重要性と、多様な「世界文学」の研究アプローチの辿ってきた変遷についての考察と解釈である。一言でいえば、比較文学のインテレクチュアル・ヒストリーについて考える本でもある。

筆者にとって『世界文学とは何か?』や本書を含む多くのダムロッシュの研究書を理解するための大きなヒントとなったのは、ハーバード大学留学時代の、ダムロッシュが担当するゼミでの彼の発言だった。自身の大学院とその後の教員生活を回顧したダムロッシュは、テキストの徹底的な精読を重んじていたポール・ド・マンがまだ圧倒的な存在だった1970年代のイェール大学で学士と博士の学位を取得した。その後、ニューヨークに引越し、テキストだけではなく、実世界と繋がっているそのテキストを政治の場、力関係の争いの場として読む必要性を訴えたポストコロニアル文学研究の生みの親のエドワード・サイードが君臨していた1980年代のコロンビア大学の英文学科に着任している。そのことを振り返り、両氏がダムロッシュ自身の研究アプローチにおそらく大きく影響したであろうという。そのせいか、筆者のダムロッシュの世界文学論に対する見解の背景には、ハーバード大学時代に読んだエヴェリン・バリッシュ Evelyn Barish の『ポール・ド・マンの二重人生』*The Double Life of Paul De Man* (2014) と、ティモシー・ブレナン Timothy Brennan の『精神の居場所：エドワード・サイード伝』*Places of Mind: A Life of Edward Said* (2021) など、ド・マンとサイードが注目した問題、つまり文学の場をテキストに見出すか、あるいはそのテキストが読まれている世界そのものに見出すか、という問題に焦点を当てるような著書がある。ダムロッシュの展開してきた学問的な議論と、その議論を表現するために使っているレトリックを生み出したアメリカの東海岸特有のインテリ層の環境を理解するためには、ぜひ読者にお勧めしたい2冊でもある。翻訳作業や流通という、文学作品の世俗的な側面への関心は、サイードのそれと結びつけてみることができそうな気が、筆者には今なおするのである。

本稿のエピグラフとして冒頭部に引用した、『諸文学を比較すること』の中心にある鍵ともいえる文章にあるように、ダムロッシュは世界文学を考察するための要素として〈世界〉、〈テキスト〉、そして〈批評家〉の三つを取り込んでいる。この構図が、サイードの著書『世界・テキスト・批評』*The World, the Text, and the Critic* (1983) と明らかに共鳴していることは、意図的にせよ偶然にせよ、上記に示した彼らの関係性の正当性を裏づけていると思われる。

ある研究分野の設立 : Institution. Institute. To Institute. Institutionalization.

冷戦下の1950年代と1960年代の欧米で数多くの大学に設立された比較文学学科には、更新の時期が来ているというのが、ダムロッシュの本書における主張である。その理由として以下の

ように説明する。

Yet many programs in comparative literature took shape in the 1950s and 1960s and have not been fully rethought since then. Major intellectual changes came with the rise of literary theory in the late 1960s and then the waves of feminist, postcolonial, and cultural studies, yet most programs have evolved through a series of ad hoc incremental steps. By now they have become motley enterprises, trying to convey—or confine—a rapidly evolving discipline within aging intellectual and programmatic structures. (5)

しかし、比較文学という学問のこれからの方向性を探るために、現在の研究アプローチの多様性を念頭に置きながら、まずはこの学問の多種多様な起源を探ってゆく必要がある。そして、その先で見つけたのは、本書各章のタイトルが名詞の複数形になっていることが示すように、単一ではなく、むしろ複数の起源と系譜である。

本書各章のタイトルは示唆的だ。はじめから順に、「起源」Origins、「移民」Emigrations、「ポリティックス」Politics、「理論」Theories、「言語」Languages、「文学」Literatures、「世界」Worlds、「比較」Comparisonsである。見ての通り、これら8章は、どれも名詞の複数形になっている。その中で最も印象的なのはもちろん「文学」の複数形である。どの英語辞典でもLiteratureの項目を引けば、この語が不可算名詞と定義されていることがわかる。しかし、近年の文学研究、特にダムロッシュなど世界文学研究の流れを汲んでいるものの間では、文学のことをliteraturesと表記する頻度が右肩上がりになっている印象を受ける。

名詞を複数形にして使用していることが示唆する多様性に対するこの肯定は、深い意味を持つ。ダムロッシュが自身の過去の研究書から表現を改めている箇所にもその意味深さは現れている。『世界文学とは何か?』の最終章では世界文学を「読みのモード」a mode of readingとして定義していたのだが、それに代わって本書で一貫して重視されているのはむしろ様々な「読みのmodes」からアプローチできる世界文学と、その研究のためのアプローチの多様性である。

本書の第1章の「起源」Originsと第2章「移民」Emigrationsでは、ドイツから亡命シトルコに赴いたドイツ人研究者のアーリヒ・アウエルバハとレオ・シュピッツァー、中国で中国語の近代化に貢献した胡適など、世界文学研究の先駆者たちを扱っている。これらの亡命者兼文学研究者はいずれも、それぞれの出身地特有の文学研究の伝統とアメリカのアカデミアの間の緊張関係を体験しながら比較文学の設立に励んだと、ダムロッシュは理解している。しかし、外的な研究伝統や文学観を新天地のアメリカに植え付ける作業は、必ずしも納得のいく結果を生み出したわけではないという。たとえば、シュピッツァーがアメリカで直面した諸問題についてダムロッシュは次のように述べている。

Try as he might, in every way and on every level, Spitzer could never get close enough to his students to bridge the gulf between the gay and orderly Vienna of his youth and the gray urban grid of post-war Baltimore. (78)

つまり、世界文学研究の昨今の境の線引きを、欧州とアメリカの地理的な空間と、戦前と戦後の時代の差異に見出しているのである。このように、ダムロッシュが考える、学問としての比較文学の誕生の裏には、不安定で不確かな新世界（戦後の新しい世界秩序）における亡命、あるいは越境研究者の担った役割が大きい。「この苦難に陥っていた研究者たちが、その行先のいたるところで目の当たりにしていた、文明と野蛮の複雑な混合の中で amid the complex mixture of civilization and barbarism that these troubled scholars saw everywhere around them」(83)、比較文学という学問の基盤は築かれたという。

第3章は「ポリティクス」Politicsと題されている。ところで、筆者はアメリカで過ごした小学生時代からこの単語に馴染んでいたのだが、それは決していち早く政治に深い関心があったからではない。おそらく、80年代のレーガン大統領政権と90年代のクリントン大統領による政権交代の頃から、アメリカ国民の一人ひとりが、自分の政治思想と、日常的な行動や消費習慣などとの強い結びつきを感じていたのだと考える。そのプロセスの完成形こそが、現在アメリカが葛藤している二極化の問題といえるだろう。スペイン語では、Estas son mis políticas等の表現は、口に出すにはあまりに不自然な言葉であるにもかかわらず、英語では These are my politics という表現をすんなりと使えるのは、不思議なくらいだ。しかし、政治観、投票傾向、思想、人生哲学など、この英単語 Politics には、集団を前にして立っている、(アメリカ的な)個の小宇宙が垣間見られるのである。同じく、世界文学研究でこの単語を使う著書(たとえば、アプターの『世界文学に抗して：翻訳不可能性のポリティクスについて』)には、この単語のそのような意味の広がりを感じる。本書の第3章において、ダムロッシュはまさに比較文学の設立を、様々なポリティクスが絡んでいる地政学の観点から捉え直そうとしている。85-96pp.の箇所は特に興味深い指摘に富んでいる。そこでは、ハリー・レヴィンヤルネ・ウェレクからミシェル・フーコーとエドワード・サイードにかけての様々な時代の思想家たちによる世界文学論がいかにかにアメリカという政治の場によって形成されてきたかについて論じている。冷戦時代のポリティクスと文学研究界との関わりについてのダムロッシュの鋭い指摘の数々は、ダムロッシュがいかにかに長い歳月をかけてこの問題に対して向かい合ってきたかをも示している。

特に、テキスト分析を重んじていた高度な文学理論の提唱者フーコーとド・マンと、ポストコロニアル研究のサイードとスピヴァックを比較する場面におけるダムロッシュによる見解が興味深い。“Whereas Said’s concerns in his essays was with academics’ relation to the larger culture, Spivak’s response turned to the politics within academia itself” (116-117).

第4章の「理論」の出だしてダムロッシュが指摘しているように、文学理論の全盛期の終焉は、早くも1988年から定期的に指摘されてきた。ただ、特定の文学理論は、絶対的かつ万能な分析ツールではなく、むしろ特定の時代に沿って作品の読みをより豊かなものにするためにあるものと再定義すれば、おそらくダムロッシュの提案している理解に近づけるかもしれない。世界文学を語るにはどの程度の文学理論の知識が必要なのかという応用的な問題にもダムロッシュは視線を向けている。

To be sure, no one needs to master every theory, any more than any of us can learn every language or study every literary tradition. Theory is not a unified whole or even a stable set of discourses, but it needs to be understood (indeed, theorized) in the contexts in which we receive and employ it. (124、下線引用者)

ここでは「文脈」contextと「正しい文脈に位置付ける」contextualizeがキーワードになっている。本著書の副題にあえて「グローバルな時代における」という表現を含んでいるのも、このためである。つまり、文学理論をその発祥地の限定された文脈だけではなく、より広い視野を用いたグローバルなレベルで再考察する必要があるとダムロッシュは主張しているのだ。そして、ダムロッシュが想定している英語圏の読者の場合、英語圏以外の文学理論の読書と、それに基づいた実践も強く推奨している。本章ではスペインのジョルディ・ジョヴェット、フランスのルネ・エティアンブル、バーバラ・ジョンソン、ブラジル人のアントニオ・カンディドとロベルト・シュワルツなどの著書についての議論もあり、自分の研究に非英語圏的な見解を取り入れたい世界文学の研究者たちにとって貴重な参考文献のリストになっていると思われる。ここで、ダムロッシュは世界文学をより深くかつ正確に研究するために、研究手法という点においても、世界各地から輸入する必要性について論じている。従来の欧米を中心に据えた文学理論の言説を非難し、次のように述べている。

Inspired by postcolonial studies, the opening of theory to the world beyond the West has now been underway for several decades, but it is still an incomplete project, not least because “theory” remains a discourse of largely European and North American provenance. (145)

こうして世界中の言説を取り入れる作業とともに、必要になってくるのは、世界中の言語への関心である。したがって、次の第5章「言語」でダムロッシュは、限られた時間しか持たない研究者は、世界中の無数の言語で書かれている膨大な文学にいかにして接触すべきかという問題を考察している。フランスの日本文学者ルネ・エティアンブルについての考察から始まっているこの章は、欧州における三島由紀夫や多和田葉子などの日本文学の翻訳についてのディスカッションも展開されており、ローレンス・ヴェヌティの新著『道具主義に反して』*Contra Instrumentalism* (2019)での新しい翻訳研究パラダイムや、アプターが提案した翻訳不可能性の問題に絡んだ議論も行われているため、翻訳研究に関心のある読者にとってもっとも示唆に富んだ章かもしれない。

We need to study more languages than ever, but we don't have to match the fluency of the national or area specialist in them all. Even the polyglot Étiemble never mastered most of the languages he studied, and he didn't expect every comparatist to learn dozens of languages. (189)

第6章の「文学」では、文学研究の単位とすべきもの、すなわち国民文学や地域文学などが

議論の俎上に乗せられている。文化空間、あるいはシステムとして観る〈文学〉は、アプローチする観点によってそれを考える時のスケールも重要な要素になってくるとダムロッシュは主張している。「国民文学」対「世界文学」という二項対立的な構図ではないことも、また重要な指摘と思われる。“A dismissively antinationalistic stance can’t do justice to the internationalism of many national literatures” (208). いわゆるメジャー文学とマイナー文学の問題や、カテゴリーの問題などをテーマにしている本章は、周縁と中心的な地域・言語の双方で活躍していた東欧出身者や亡命作家を取り上げている。その中で、カノンとハイパーカノン、マイナーと超マイナー (“Canon and Hypercanon, Minor and Ultraminor,” [223-233]) のディスカッションはとて興味深い。また、それに続く「グローバルなメディア空間における文学」「グラント・セフト・オウィディウス」などのセクションにおいて、ダムロッシュによるおそらく最初の文学とテレビゲーム論が登場しており、テレビゲームなどのマルチメディアと世界文学研究が交差する分野のこれからの発展を予期させ、とても想像を膨らませられる内容となっている。

第7章の「世界」は、トルキンの大長編小説『指輪物語』についての、鮮やかな文章から始まっている。ダムロッシュの『指輪物語』好きについては、彼のブログ形式のプロジェクト『80冊世界一周』を筆者がスペイン語に訳した去年からある程度知っていたが、前述のブログでやや一般読者向けの口調で語られていた内容を、本書ではよりアカデミックに議論している。本章では、『指輪物語』が代表するファンタジー文学のジャンルだけではなく、大衆文学という区切りのもとで見下されがちである探偵小説やSF小説といったジャンルは、却って世界文学を考えるための重要不可欠な軸(ノード)として捉え直すべきだと主張している。実世界と架空世界のつながりを強調する場面での指摘もまた興味深く、本書におけるダムロッシュの志向性も反映している。

I begin with the world created within the literary work in order to emphasize that any substantial work of literature creates its own primary context, its world, which we can explore itself as well as in relation to other literary world and to the social world outside the text. (258、下線引用者)

こうして、現代の国際資本主義から考えたトルキンとガルシア＝マルケスの大胆な比較も十分に可能であることを主張し、従来のフォークナーとの比較よりは、トルキンと比較することによってガルシア＝マルケスの文学の特徴がさらに際立って見えやすいとも述べている (262-264)。つまり本章は、国民文学を単位としたり、作家間の影響関係にもとづいたりするアプローチ同様、架空世界そのものの比較も実践可能であると力説する内容で、刺激的な示唆や指摘に富んでいる。

第8章の「比較」では、ダムロッシュが以前から数十年にわたり注目してきたテーマ、すなわち〈比較可能なもの〉“The comparable” と〈比較不可能なもの〉“The incomparable” の問題に関する最新の見解を述べている。古今東西の同問題に挑んだ人々、例えばウエレクやクラウディオ・ギジェン、マルセル・ドゥティエンヌ、張隆溪、ナタリー・メーラスなどの論考を参照し

ながら、ダムロッシュは世界文学研究が世界中の学者によって行われる際に浮き彫りになる時代区分の問題について論じ、「グローバルな現代性」「Global Modernity」という区分が果たしてあり得るかどうかにについても考察する。そして、仮にそのような総合的な名称で呼ばれることが可能であるとすれば、従来の比較文学にあまり見られなかった非西洋的な視座から考えた、非西洋的な作家同士の作品を対象にする研究の必要性を、この時代のケーススタディとして日本の三島由紀夫とタイのククリット・プラーモートを比較することを通して、訴えている。“What we need are pluralistic studies that admit materials which challenge and modify the aesthetic, political, and historiographic frameworks we bring to them” (333).

上記の文章は、まとめとなる最終章の主な主張へと直接繋がっている。結末部の「結論：ある学問の復活」「Conclusion: Rebirth of a Discipline」という題は、言わずもがなガヤトリ・C・スピヴァクの著書『ある学問の死——惑星思考の比較文学へ』(*Death of a Discipline* 原書 2003 年、邦訳 2004 年)への明らかな挑発でありながら、唯一単数名詞 (Rebirth) になっていることも興味深い。なぜならこれは、多様に存在する研究対象とアプローチは最終的に一つの学問に合流し、世界文学研究は健在で、これからより成長していく研究分野であることは、絵空事ではなく確固たる現実であることを主張しているからである。つまり、世界文学研究とは、すでに決まっている研究方法や理論のカノン一式が定まっている学問ではなく、現在進行形で生まれ変わろうとしているものということなのだ。

まとめ

Tradition itself is a fine thing, if it satisfies the soul (...) but a perturbed soul prefers research. (346)

アメリカの主要文芸誌ザ・ニューヨーカーかザ・アトランティックにも掲載されるような繊細なタッチの文章が、一貫して本書に散りばめられている。研究書にも、一般読者向けの著書にもこうした高度な英語を用いているダムロッシュの姿勢からは、読者を説得するために、アカデミックな議論の正確さも大事ではあるが、読者から笑いなどの反応を呼び起こすレトリックも大事ということを教えられるように思う。彼の独特な英語づかいについては、ダムロッシュが大学院に入学する前のある時期ニューヨークの政治家の演説執筆家として務めたことを考えると納得する。この経験のためか、本書にはたまにハイブローとローブローの現代アメリカ文化にかなり詳しくないとそのよさがわからないような文章が随所に見られるのも事実である。もし本書の日本語訳が刊行されることになったら、その箇所はどのような日本語にすればよいのかと疑問に思ったものもあったくらいである。

しかし、もちろん上記のレトリックと文体に対する言及は単なる本書の特徴を述べたにすぎず、問題点を示したのではない。問題点としては、些細なものではあるが、以下のようなものが挙げられるように思われる。たとえば、筆者のようなミレニアル世代の一員ならば、マルチメディア研究と世界文学研究をダムロッシュが交差させるさい、研究対象と研究方法に対して、やや不満

を覚えざるを得ないと思われる。その事例として、世界文学研究の観点からテレビゲームを論じている第6章が代表的かもしれない。ダムロッシュはそこで、評判が決して芳しくない、むしろ駄作に近いとまで評されているダンテの『神曲』の地獄篇をゲーム化した『ダンテズ・インフェルノ～神曲 地獄篇』(2010)について論じているが、アクションゲームに詳しい読者ならばこの派生的なゲームを取り上げる意味をあまり感じられないのが正直な印象ではないだろうか。むしろこのジャンルの王道で、ギリシャ神話や北欧神話をアダプテーションし、21世紀のアクションゲームの大傑作とされている『ゴッド・オブ・ウォー』シリーズなどを取り上げていけば、より実りのある議論になっていたに違いないだろう。

同じく、Young-Hae Chang Heavy Industries の魅力を一度も感じたことがない（あるいは、ポルヘス的に言い換えれば、その作品の鑑賞の愉しみを理解できるように恵まれていない）筆者は、彼らの作品より、むしろ YouTube で新しい文学ジャンルとして生まれようとしている Video Essay の潮流や、ネットで頻繁に行われる文学をも含む多メディア作品のリアレンジと再利用から現れた作品について扱っていたら、議論の幅とその応用性がより豊かなものになっていたと思わざるを得なかった。他にも、第6章のセクションタイトルにも、著名なゲームシリーズである『グランド・セフト・オート』と『ファイナル・ファンタジー』への言及があるものの、それらのシリーズについての深い議論の展開も残念ながら見受けられなかった。ファイナル・ファンタジーにおけるトルキンの影響や、グローバルな観点から考えた日本像とファイナル・ファンタジーの関係などは、まさに興味深い議論の出発点というべき内容になっていたが、そのまま発展せずに章が終わっていた。これは、本書が本格的にこれらのゲームを世界文学的な観点から扱うというよりは、世界文学の若手研究者にゲームなどのメディアを扱ってもいいと示すための試みだったからかもしれない。

最後に、ダムロッシュの以前の著書について、内容が一般的過ぎて高度な文学理論に欠けており、外国語原文での綿密な精読が欠けている本だ、という後味を覚えた読者は、本書によってダムロッシュを見直すことはあまり望めない、と言っても種明かしにならないだろう。ダムロッシュの世界文学論は精読が不足しており、専門家の的確な原文の分析もない、などの批判は、その正否はさておき、『世界文学とは何か？』のころから批評家によって指摘されている。また筆者自身もハーバード大学比較文学学科で小声で聞いたことでもある。しかし、本書は『世界文学とは何か？』の精緻化だけではなく、むしろこれからの研究の道標を示してくれる著書として読んだ方が生産的だと感じる。言い換えれば、以前の研究路線からの見事な延長線ではあるが、延長されている本線を元から好まぬ読者にとっては不向きな著作であるというほかない。

しかし、上記の点さえ問題でなければ、本書が課題として取り組む大掛かりな作業を、ダムロッシュは見事にこなしていると認めざるを得ない。つまり、現在<世界文学研究>が確固たるディシプリンへと向かう段階で、研究分野として直面している諸問題を真正面から超克しようと試みているというより、今までの道程を再確認し、その作業によって見えてくるいくつかの突破口を探っていくような一冊であるように思われた。今日のアカデミックな言説において、<世界文学>という概念は、単一の像を結ばず、むしろ様々なイメージを形成する。このようなく世界文

学>研究のこれからの発展をたしかに導く指南書として本書の意味は大きい。

2021年という今日に、日本の読者に、本書と、近日刊行予定の『ハーバード大学ダムロッシュ教授の世界文学講義：日本文学を世界に開く』（2021年末刊行予定）、そして前述した洋書『80冊世界一周』*Around the World in 80 Books*（2021年刊行予定）をまとめて読むことをぜひ勧めたい。これらの3冊を読むことによって、ダムロッシュのキャリアの集大成を楽しむとともに、ダムロッシュの世界文学論から捉えた、世界文学と日本文学の関係について理解することもできると思われる。

注

1. Damrosch, David. "Book Review." *Comparative Literature Studies*, vol. 51, no. 3, 2014, pp. 504–508. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/10.5325/complitstudies.51.3.0504. Accessed 12 Aug. 2021.
2. このタイトルの抽訳はやや妥協的である。というのも、サイド自身の自伝『場違いな人生』*Out of place*（邦訳『遠い場所の記憶——自伝』中野真紀子訳、みすず書房、2001年）のキーワード“Place”を、ブレナンが意識的にこの作品のタイトルにおいて言及していることは明らかなためだ。